

目 次

緒 言	i
序 説	1
I 方言研究の中の方言分派論	1
II 方言地理学の中の方言分派論	2
III 分派〈区画〉	3
IV 分派関連 系脈 分派系脈論	5
V 方言分派系脈論の次元	6
VI 方言分派系脈論の目標	7
VII 私の方言分派系脈論	8
VIII 方言分派系脈論と地方文化論	9
前 章 日本方言地理学のあゆみ	12
第一章 総説 「日本語方言分派論」の形成	15
第二章 昭和日本語方言の分派状態	20
第三章 琉球方言分派	23
第一節 非琉球全地域（本土）方言分派と琉球方言分派	23
——琉球方言分派の措定——	
一 「南島方言」という名称	23
二 琉球方言についての姉妹語との考え	24
第二節 琉球方言分派の成立	24
一 中央語周布	24
二 地域での自変・自己改新（辺境変移）	25
三 琉球方言の内部分派	27
第三節 琉球方言の独自性	29

一 静態論	29
二 三母音	29
三 動詞終止形	29
四 特定地域	29
第四節 琉球方言分派の他への関連性	30
一 三母音について	30
二 尊敬法動詞「たまわる」について	32
三 造語法について	33
第五節 琉球方言の動態	35
一 沖縄方言・宮古方言・八重山方言・与那国方言の方言差	35
二 宮古方言と八重山方言と	35
三 沖縄本島の属島について	36
四 奄美諸島方言	37
五 動態相の発展的観察	39
第六節 琉球方言分派と九州方言分派	39
一 旧の‘南島方言’観	39
二 連関相 ～音韻～	39
三 連関相 ～文法～	41
四 連関相 ～語詞～	43
第七節 「琉球・九州」方言分派	45
第四章 九州方言分派	49
第一節 本土方言(内地方言) 〈とりあえずこれら〉での東西対立と九州方言	49
一 西部方言の中の九州方言	49
二 判定規準について	50
1 根幹的なものという考え	50
2 国語史的見地のこと	52
3 総合的な判定を	54

三 九州の人々の所感と東京の人々の所感と	54
第二節 九州方言の地位	57
四 九州方言の存立	57
五 九州方言の固成	58
六 『日本言語地図』に見られる九州域	60
第二節 九州方言内部分派	60
一 三区分について	60
二 三分派の静的把握	61
0 九州方言三分派図	61
1 豊日方言	63
2 肥筑方言	70
3 薩隅方言	86
○ 三分派〈三方言〉静的把握のむすび	92
第三節 九州方言の動態	93
一 九州方言の史的三段層	93
1 史的三段層分派状態	93
2 九州方言東西分派	93
3 西がわについての分析的考察	94
4 史的三段層分派の改釈	97
5 新化と旧態	97
二 九州方言分派の系脈	101
1 他との関連	101
2 九州方言と中国方言	101
3 九州方言と四国方言	109
4 系脈の将来	114
第五章 中国方言分派	115
第一節 中国方言の把握と定位	115

一 中国方言の把握	115
二 中国方言の定位	121
第二節 中国方言の内部分派	121
一 中国方言の内部区分について	121
二 南北二分派	122
第三節 中国方言の動態	126
一 山陽がわ対山陰がわ	126
二 中国方言の系脈	128
1 山陰線	128
2 連九州	128
3 中国山陽対近畿	130
4 中国と四国	131
5 おわりに	132
第六章 四国方言分派	134
第一節 四国方言の把握と定位	134
第二節 四国方言の内部分派	137
一 四国西南部について	137
二 四国方言の二分派	139
——土佐方言の特立——	
第三節 四国方言の動態	143
一 土佐と非土佐とでの動態	143
二 四国方言の系脈	145
1 四国方言の外周	146
2 系脈の将来	153
第七章 近畿方言分派	155
第一節 近畿方言の把握と定位	155
一 近畿方言の把握	155

二 近畿方言の定位	164
第二節 近畿方言の内部分派	166
一 内部様相	166
二 北部分派	167
三 南部分派について	167
第三節 近畿方言の動態	169
一 内部での動態	169
1 「中部」対「北部・南部」での動態	169
2 内廓対外廓の動態	170
二 外部への系脈	171
1 南海道系脈	171
2 中国地方へのつながり	174
3 北陸道へのつながり	175
4 中部地方との関係	176
5 近畿方言の対東西性	176
第八章 中部方言分派	178
第一節 中部方言の把握と定位	178
一 中部方言の把握	178
1 はじめに	178
2 北陸方言について	179
3 新潟県越後北部	189
3' 新潟県佐渡	198
4 中部方言の西南境	198
5 中部方言の南限	199
6 中部方言の東境	199
二 中部方言の定位	207
第二節 中部方言の内部分派	208

一 複雑性	208
二 中部方言の東西二分	208
1 東西二分	208
2 東系の「ナイ」(打消助動詞)	210
3 文末詞「ナモシ」類	211
4 諸家の説に依って	212
三 東半の内部	214
1 「佐渡・越後」と信州以南	214
2 佐渡方言と越後方言	214
3 東山東海がわの三分区	215
4 長野方言	216
5 山梨方言	216
6 静岡方言	217
四 西半の内部	218
1 北陸がわと東山東海がわ	218
2 北陸方言とその内部	218
3 東山東海がわの二区分	221
4 岐阜方言	221
5 愛知方言	223
第三節 中部方言の動態	226
一 内部での動態	226
1 諸方言関係の動態	226
2 南・北の動態	226
3 中部方言下の裏日本地域	228
4 東西両大方言境界線の動態	228
二 外部への系脈	232
1 中部方言北域から西方への系脈	232

2 中部方言北域から東方への系脈	235
3 中部方言北域地帯の裏日本性	236
4 東山東海がわ西半の近畿への系脈	237
5 東山東海がわ東半の関東への系脈	238
第九章 関東方言分派	240
第一節 関東方言の把握と定位	240
付 節 茨城・栃木の両県地方について	243
一 三地点対比	243
二 三作業比較	248
三 巡検の旅	251
四 関東東北二県方面の地方的異色	253
第二節 関東方言の内部分派	254
第三節 関東方言の動態	259
一 関東地方本土での周辺山地とそれ以外と	259
二 外部への系脈	264
三 伊豆諸島(八丈島・青ガ島を除く)方言	266
付 章 八丈方言分派	272
第十章 奥羽方言分派	281
第一節 奥羽方言の把握と定位	281
一 奥羽方言の把握	281
二 奥羽方言の定位	282
第二節 奥羽方言の内部分派	283
一 南・中・北の三分派	283
二 東・西の二分派	290
1 東西二分派の見かた	290
2 地文人文上の考察	290
3 東西差諸事例	291

4 拙著『方言敬語法の研究』正統二篇の付図から	298
5 「東・西」要地方言対比	300
三 分派の静的把握（上来の二つの見かた〈東西分派と南北分派と〉の総合）	307
第三節 奥羽方言の動態	308
一 南から北へ	308
二 奥羽方言の系脈	312
第十一章 北海道方言分派	314
第一節 北海道方言の把握と定位	314
第二節 北海道方言の内部分派	317
一 ‘海岸方言’と‘内陸方言’	317
二 北海道方言の‘区画’	322
三 新内部分派観は	323
第三節 北海道方言の動態	325
第十二章 分派生成の理	326
第十三章 東西二大分派	329
～琉球方言を別にして～	
○ はじめに	329
一 東西二分の基質	329
二 風土差	331
三 文化差	332
四 東西差	333
第十四章 全国周布	334
一 周 布	334
二 全国周布	335
三 東北と西南	339
四 「隠岐方言～八丈方言」ほか	341

五 全国周布の時代性	341
六 全国辺周地帯	342
七 東西分派	342
第十五章 日本語方言分派論結章	344
一 分派表と分派図	344
二 分派論（→分派系脈論）につづくもの	346
三 諸方言分派の将来	346
結 語	349
あとがき	350
索引（I 事象索引 353 II 事項索引 375）	352

図 版 目 次

琉球方言地域	28
九州方言分派図	62
中国方言分派図	120
四国方言分派図	141
近畿方言分派図	164
中部方言分派図	206
関東方言分派図	258
奥羽方言分派図	285
北海道方言分派図	314
分派図	345

序 説

日本語方言分派論は、日本語の「方言分派」を問題にするものである。方言分派とは、体系的存在としての方言を言うものである。

方言は、おなじようなものが相互に対立対応して存在しあう相対的なものであり、いわば関係分子である。こういう分子的存在は、全一的なものの分派と見られるものである。それゆえ、私は、方言を、あえて方言分派とよぶ。この名を用いることによって、方言の相対的存在を明示したいと考えるものである。

方言という体系的存在が、おのずから分派的存在であるならば、方言対方言の存立を見る見かたは、おのずから方言分派論になる。

I 方言研究の中の方言分派論

方言研究あるいは方言学の中で、方言分派論は、どこに位置するであろうか。

方言学は、よこ軸の研究方向とたて軸の研究方向を持つ。前者は共時論の方向であり、後者は通時論の方向である。共時論の方向では、いわゆる記述的研究、あるいは構造論的研究がおこなわれる。通時論の方向では、いわゆる言語地理学的研究がおこなわれる。(言語地理学が通時論の方向のものであることは、のちになお述べる。私は、言語地理学を、通時論に属するものと考える。)

方言研究ないし方言学からすれば、この通時論の方向について言う「言語地理学」の名は、穏当ではないと言える。「言語地理学」は、その名のとおり、言語の地理学として、広汎にこれを考えることができよう。方言に関しては、方言地理学の名を用いるのが適切と考えられる。

言語地理学の名が広汎に用いられて適切であることは、つぎのような事実に徴しても明らかである。

①地中海域に関しては、沿岸諸言語を一括して対象とし、これについ

前 章 日本方言地理学のあゆみ

ここで私は、わが国の方言研究での、いわゆる言語地理学的研究の過去史をかえりみておきたい。

まず特筆すべきは、明治末年の国語調査委員会の活動である。その結果は諸種のとりまとめとなったが、中でも記念すべき作品としうるのは、『口語法分布図』（明治39年）、『音韻分布図』（明治38年）である。これらは、まとめて方言分派論的作業であったと言えることができる。

上の兩大分布図を承けて、やがて画期的な考説を発表せられたのが東條操先生であり、その著作は、『大日本方言地図 国語の方言区画』（目黒書店 昭和2年）である。東條先生はこれを発端にして、後來、長く区画論を説かれるにいたった。

昭和8年となって、明治書院から『國語科學講座』が発刊され、この中で、方言関係の地域別研究が発表された。たとえば、『九州の方言』（吉町義雄氏 昭和8年）というようにである。このような地方別は、やはり東條先生の方言区画観に関係の深いものであった。

あたかもこの期に、江實氏は、『國語科學講座』の中の一冊、『言語地理學』（昭和10年）を発表せられた。海外諸国の言語地理学状況が、ほぼ総轄的に約説紹介されたのは、これがはじめてである。江實氏の功は大きい。

もっとも、同時期にすでに、ド・ソシュールの『言語學原論』（小林英夫氏訳 岡書院 昭和3年 岩波書店 昭和15年）があり、中の「地理言語学」は、すでに私どもの重要文献であった。なお、小林氏とともに吉町義雄氏のご活動があり、雑誌『方言』そのほかに氏の諸訳述が出た。

昭和20年をすぎては、国立国語研究所の活動が高まってきた。その『日本言語地図』全六巻は、この道の大作である。この研究活動に、グロータース氏の力のあったことは、特筆しなくてはならない。氏は、身をもって西洋言語地理

学移入の役をはたされた。その影響下から、日本の多くの言語地理学的業績の出たことは、多く言うまでもない。

昭和36年に東京堂から発刊された『方言学講座』全四巻は、さきの『國語科學講座』以降での方言研究の一大集成である。この中に、方言地理学の業績がふくまれている。

昭和37年には、国語学会編『方言学概説』（武蔵野書院）が出た。この中に、地方別の方言概観が見られる。

のち、昭和39年に、『日本の方言区画』（東條操先生監修 日本方言研究会）が出た。これは、この期での日本の方言地理学の一大収約と見ることができよう。

やがて、昭和44年には、柴田武氏の『言語地理学の方法』（筑摩書房）が発表された。

越えて、昭和52年には、岩波講座『日本語』11の『方言』が出た。

私は、昭和7年の小発表以来、二・三の方言地理学的研究を発表して、昭和37年には『方言学』をまとめた。この中の通時方言学の章で主張したのは、方言地理学についての、方言事象地理学と方言分派地理学との二本の柱の樹立である。

私は、この時までには、私なりに、かなり多くの方言分布図をつくってきた。（いろいろの地域にわたる。）そのような実践経過をたどって、私は、「方言事象地理学」と「方言分派地理学」とのたてわけに到達したもののようである。ワードのジオグラフィーとスペースのジオグラフィーとを見あわせる考えかたが、しだいにつよまってきたようである。

外国の言語地理学にもラントシャフトといったような考えかたがあり、方言分派を分派として見つめていく研究も見られるけれども、総じては、かれに方言事象を追う地理学的研究がさかんであろう。このような状況は、私をして、方言分派地理学を考えさせるのにじゅうぶんであった。